

平成 28 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 「医師国家試験のあり方に関する研究」
第 1 回研究会議 議事録

日時：平成 28 年 6 月 20 日（月） 10：00～12：00

場所：公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構 6 階会議室

出席者：青木茂樹、石田達樹、大西弘高、鈴木利哉、奈良信雄、仁田善雄、野上康子、
高木 康、（鈴木貴士）

会議：

研究班員自己紹介

- ・青木茂樹、岡崎仁昭と仁田善雄先生に新研究班員として加入していただいた。これは新タイプの CBT 作成に必要な知識と技能をお持ちであるためである。

議題

1. 平成 28 年度厚労科研内容の確認

1) 海外における CBT の現状視察

- ・昨年度、台湾と米国、インドネシアに海外視察した。
- ・今年度はカナダ、欧州、韓国を考えている。
- ・欧州は CBT 後進国であり、視察の必要は少ない。
- ・韓国は OSCE を中心に視察して、CBT についての考えを聞く機会とする。
- ・カナダは視察する必要がある。
- ・台湾、米国、インドネシア以外の海外の国の視察は必要である。

2) マルチメディアを使用した CBT の作成

- ・新しいタイプの CBT の施行
- ・マルチメディアを利用した CBT
- ・アニメーションを活用する。
- ・ページングの CBT、何枚も画像を見て設問する
- ・画像だけだと身体所見を削除する
- ・くも膜下出血だと画像だけで良い、症例の情報を必要としない。
- ・急性硬膜下血腫も同様である。
- ・画像で診断が可能であるが、1 枚で十分か。
- ・Q 問題のように、医療面接、身体診察を画像で診断する。
- ・必ずしも戻れない状況にする必要はあるか。
- ・画像一発問題で良いか。
- ・病理の問題はどうか。いくつかの画像から病変を探し出す。
- ・現在の授業では病理画像から病変を探し出す。
- ・バーチャルスライドでは自分の見たい部分を拡大する。

- ・ コンピュータの性能が必要である。
- ・ マルチメディアの特徴を利用できる問題を作成する。
- ・ できれば 10 設問ぐらい作成して試行する。
- ・ 音声、画像、病理の問題??
- ・ 理想の DVD を考えてもらう。
- ・ 消化管内視鏡、気管支の写真から気管支の部位を設問する（今年の国試）。
- ・ マルチメディアを利用した問題を作成したい。
- ・ 米国でもマルチメディア活用の CBT はそれほど開発されていない。
- ・ フローな診断、臨床推論的な設問が良い。
- ・ コンピュータにキーワードを入力して設問を進行させる。
- ・ 米国の CCS のような問題。
- ・ マルチメディアを利用した設問を作成してみる。
- ・ 研究班の最終ゴールは国試でのマルチメディア活用 CBT を施行する。
- ・ CBT を利用した場合にはこのような問題ができる。
- ・ 卒前の CBT への還元も可能である。
- ・ マルチメディアを活用するとどのような評価が可能か
- ・ 複数回の CBT を受験することは不可能ではないか。
- ・ 1 回の国試受験しかできないがこの時に CBT を利用できるか。
- ・ コンピュータの特性を利用した設問を作成する
- ・ 正しくコンピュータ操作をしない場合のリスクを考える必要がある。
- ・ 適切でないワードで検索した場合でも反応する。
- ・ 1 問でどの程度の能力を測ることが可能か。
- ・ 問題作成のためにどのくらいの時間と労力が必要かを研究する。
- ・ 紙ベースと CBT は戻ることが可能か否か
- ・ 戻っても可能な問題作成には十分な能力が必要である。
- ・ マルチメディア活用すると戻れない問題よりも困難な点も多い。
- ・ 画像一発問題では医療面接や身体診察を順番に問題ができる。
- ・ 連問の最終的に画像で設問する。
- ・ 禁忌肢を選択したら患者が危険な状態になる
- ・ 米国では CCS として作成しており、解答時間を決めている
- ・ 自由記載で選択肢を選択する問題は困難ではないか。
- ・ CBT の長所と短所を議論することが今回の研究班の目的にしてはどうか。
- ・ マルチメディアを活用した設問にするとどの領域を評価できるか。
- ・ 国試は公平性を保つには時期と場所を一定にする必用がある。同じ受験環境とする必用がある。
- ・ このような受験環境を設定するには莫大な費用が必要である

- ・世界的に CBT を使用した国試が採用している。
- ・パイロット的に試用する時には、外国人の受験資格での試験に利用可能か。
- ・100～200 人の受験生に対する問題のなかにマルチメディアを利用した CBT を施行してはどうか。
- ・予備試験から USMLE でも採用されている CBT を利用する
- ・まずは予備試験で、費用ができれば国試に導入するか。
- ・マルチメディアを利用した問題だけタブレットを利用することも可能か
- ・受験生が遠隔診療を行うことにして自分のパソコンを利用した問題も可能か
- ・マルチメディアを廉価に利用するには使用法を考える必要がある。
- ・東欧の日本人の受験資格人は増加傾向にある。
- ・医学部校の授業時間により予備試験にするか診療能力資格試験を受験できる
- ・英語の問題は簡単
- ・二国間連携ではあるが、日本語で診療ができる、国試を合格できるヒトでないと合格としない。
- ・英語だと簡単か、すでにできている問題もある。
- ・キーワードは英語で入力できる、
- ・コアカリでは教養課程で修得する
- ・予備試験の委員は CBT の採用を OK しているか。
- ・まだであるが、受験資格に CBT 受験を考えている。
- ・大学入試センターではタブレットを利用することを考えているので、それを利用できないか。
- ・役所間での疎通が難しい
- ・センター入試では聴診器は回収している
- ・CBT と CBT の導入に関する長所と短所をまとめるので、それを付記してほしい

2. 研究計画立案

1) 海外視察日程と研究員

- ・ドイツは日本と同じで紙ベース、イギリスは国試がない
- ・ECFMG は海外戦略を練っている。
- ・日本版を作成することも考えている。
- ・世界戦略を考えている。
- ・カナダが良いか。
- ・台湾も含めて CBT に移行する方向にある。
- ・韓国はトップダウンで実行できる。
- ・IT も発達している。
- ・テストセンターを設立すると CBT 可能か。

- ・ 韓国は OSCE ではセンターを設立した
- ・ PACS などの画像は OSCE で設問する形式も良い。
- ・ CBT で無理なら OSCE で利用することが可能か
- ・ OSCE では進行していないので・・・
- ・ どちらでも良いから画像や音声のマルチメディアを利用する
- ・ 海外では画像判読を深いものまで求めている。
- ・ 日本では求めている。
- ・ 研修医でもレントゲン画像を判読しなければならない。
- ・ 見落としがある 見方と注意しなければならない
- ・ 偶然に見つけることができる所見、気が付いていない異常所見について判読する。
- ・ このような病変の画像を判読できるような設問は可能か。
- ・ 100 枚の画像から見つける。
- ・ 大動脈解離の症例で実は肝硬変が隠れている。
- ・ くも膜下出血では動脈瘤ばかりでなく、外傷性もある。
- ・ 画像判読能でのマイルストーンはあるのか。
- ・ 読めることとなっているが、何をもって判読できるとするか。
- ・ ガイドラインで決めているが、あいまいで読めるとしている。
- ・ コアカリでは深みを自分で設定できる。
- ・ 国試では CT、MRI との記述ばかりであるが、国試合格後の研修医では指導医の下で判断できる能力を問うている。
- ・ マイルストーン的な記述にはなっていない。
- ・ 研修医が判読できる水準として CT を出題する。
- ・ 研修医が判読できるもの、典型的な症例を提示する。
- ・ 国試から共用試験へと画像の判読能が落ちてきた。
- ・ 日常の requirement が深いものまで求められるようになった。
- ・ 共用試験ではほとんどの疾病の画像が出題されるようになった
- ・ 国家試験は問題が分かるので、難しい問題になるのは分かるが、共用試験では年々難しい症例になってきている、公開されてないのに不思議である。
- ・ 臨床実習で要求される内容が深くなってきている。

2) マルチメディアを使用した CBT 作成計画

- ・ 昨年度は偶然に台湾で 7 月に行われたので視察ができた。
- ・ 今年度は視察ではなく、マルチメディアを利用した CBT の作成を中心にした方が better か。
- ・ カナダは行った方が better か
- ・ 4 月か 10 月か (春と秋に行っている) 10 月 28、29 日の実施を確認している。

- ・ OSCE についてはパイロットの視察は可能であった。
- ・ CBT でもパイロットは視察が可能か。
- ・ 視察では費用負担が多いので、視察をしてほしい。
- ・ 韓国は 10 月から 12 月に OSCE を実施する。
- ・ 1 月に筆記試験なので、分けて視察する必要があるか。
- ・ センターを 2 つ設立する (2 フロアでは不足する)。
- ・ 受験生の人数に対応できない。現在は 2 フロアで朝昼行っている。
- ・ OSCE は継続するか。成功体験として、クラークシップは後退したが、シミュレーション教育は進んだので、このまま継続する。
- ・ 臨床実習は後退したが、国試に対応するための実習を行うようになった。
- ・ 不合格者は多くない。全受験者の OSCE を録画している。
- ・ マルチメディアを活用した CBT の作成を行う。
- ・ 画像を活用した問題形式を青木先生を中心に、動画については岡崎先生を中心に計画してもらう。
- ・ 文書から動画での評価を学生に行ってもらおう。
- ・ 動画を活用した問題形式・様式の検討。どのような問題が適しているか。
- ・ 音声はセンター入試でも導入されているが、CBT ではどのように導入できるか。
- ・ 音声は心音や呼吸音を適応する？
- ・ 共用試験 OSCE で心音を聴取する問題であったので、取り入れることは可能である。
- ・ 難聴者への対応は。
- ・ 動画ではカラードップラーなど動きのある画像での診断を行う。
- ・ 動画と静止画では異なる。
- ・ 色調はモニターの色合いで異なっている。病理標本も同じ。
- ・ 共用試験で問題になっていないが。
- ・ 7 月ぐらいまでにマルチメディアを活用できる CBT の問題作成。
- ・ 秋までにどの程度が可能かが必要。
- ・ 臨床推論の問題が良いのではないか。
- ・ マルチメディアではリアルな患者を用いないと良好な問題を作成できない。
- ・ 画像から問題作成するより、症例から画像を示して問題を作成する方が良いかもしれない。
- ・ 10 問を試作するのは簡単であるが、連続して作成するのは難しい。
- ・ ハンガリーの医学部を視察することも大切である。視察は考えている。
- ・ ハンガリーはまともな教育を行っている。
- ・ 講義は英語のテキストと講義であるが、臨床実習ではハンガリー語で行わなければならない。

- ・ハンガリー語を履修している。
- ・診療録は英語か。
- ・意思決定をして上級医に報告するのが、臨床実習で行われている。
- ・第2回会議を8月ごろ行いたい。
- ・この時に、CBTの長所・短所、国家試験への導入についての検討を行う。
- ・マルチメディアを活用したCBT作成について議論を行いたい。
- ・疾患と患者の選択を行いたい。
- ・10～11月にプロトタイプマルチメディアを活用したCBTを作成する。
- ・同時期に海外視察を行いたい。
- ・マルチメディアを活用したCBTの例示。
- ・資格試験へのトライアルは来年度に受けられるようにして、試験に導入するには数年を必要とする。
- ・30年の改善検討会に提示するのが検討中である。
- ・実際に導入するまでに一度試しに受験してもらおう。これを数回繰り返すことが必要である。
- ・他の成績も分かっている受験生に適応して評価する必要がある。
- ・マルチメディアを活用した問題は数台を試行問題として出題することも必要である。
- ・予備試験でトライアル的に試行することも必要である。
- ・予備試験は100名程度。
- ・ITを持っているテストセンターを使用することも可能であるか。

資料

平成27年度厚労科研研究報告書

- ・4回の研究会議の議事録
- ・岡崎先生と青木先生の講演 ppt
- ・奈良先生と高木先生の海外視察記録（台湾、米国）
- ・大西先生海外視察記録（インドネシア）